

## 編集後記

小さな旅をした。ふだんは家と学校の間を自転車で行復するだけだから、こんなに新鮮な気分にはなつたのはひさしぶりだ。時間さえあれば乗り物は遅いに限る。そして乗り物にのつたときは必ず一つの実験をすることになっている。窓の外を流れてゆく景色がある速度になると、私の頭のなかに暖かい空虚といつたものが充滿してきて、落ち着いた気分になり、知らぬ間に眠りに、あるいは没意識の状態に落ちてゆくのである。おそらく普通は観念というものは頭のなかをある速度でもって旋回しているのだと思う。机に向かつて物を考え、観念を、手で掴むように、つかまえようとしても、それはぬるぬるズルズルと逃げて去ってしまう。意識の速度が観念の速度に追いつかないのだらう。文章を書く作業はいつもこんな具合で、あとには不安と不満ばかりが残されることになる。車窓から流れゆく景色を見てゆつたりとした気分になるのは、観念の流れの速度が景色のとび去る速度と一致するときであるようだ。観念は景色へと身を移し、そしてそれによつてとかされ、するど頭のなかには見える空虚が現れてくる。もう観念のズルズルに悩まされ苛立つこともなくなる。——突然赤ん坊の泣き声に意識が目覚まされる。窓の外にはトンネルを抜けて弓状の片瀬が現れていた。また見るともなしに景色を眺める。

(乙)

平成六年七月十五日 印刷  
平成六年七月二十日 発行

(非売品)

編者 愛知大學文學會

代表者 安本博

印刷所 豊橋市小池町  
東邦印刷工業所

発行所 豊橋市町畑町  
愛知大學文學會

振替 〇〇八三〇一—四五六五四